

脂綿を使用した。脱脂綿の代わりにティッシュやキムタオルを使用している人もいる。ジョウカイなどの爪が大きく体が柔らかい甲虫は、脱脂綿の繊維に爪が引っかかり易く脚が取れてしまうので繊維が短いこれの方が適していると考えられるが、チャック式ポリ袋に入れるには適していないだろう。その他にも様々な問題があると思うので、良い方法があれば紹介いただきたい。

末筆ながら、文献についてご教示頂いた堀繁久氏（北海道博物館）、文章を読んでご意見頂いた丸山宗利博士（九州大学総合研究博物館）と小西和彦博士（愛媛大学ミュージアム）、齊藤明子博士（千葉県立中央博物館）、奥島雄一博士（倉敷市立自然史博物館）にお礼申し上げる。また、今回の規格化については、北海道大学総合博物館とビショッ

プ博物館での標本調査の際に思いついたことである。これらの博物館にも感謝申し上げる。

引用文献

- 馬場金太郎・平嶋義宏, 2000. 新版昆虫採集学. 812 pp., 九州大学出版会.
堀 繁久, 2002. 採集法解説シリーズ[5] PT:ピットフォールトラップ. 鯉角通信, (5): 85-89.
熊澤辰徳, 2016. 趣味からはじめる昆虫学. 160 pp., オーム社.
奥本大太郎・岡田朝雄, 1991. 楽しい昆虫採集. 302 pp., 草思社.
平野幸彦, 1985. 甲虫とつきあう本. アウトドア・シリーズ 114, 110 pp., 日本交通公社.
福田晴夫・山下秋厚・福田輝彦・江平憲治・二町一成・大坪修一・中峯浩司・塚田 拓, 2009. 増補改訂版昆虫の図鑑採集と標本の作り方. 261 pp., 南方新社.

(2017年4月9日受領, 2017年6月6日受理)

【短報】新潟県におけるヤマトオサムシダマシの記録

ヤマトオサムシダマシ *Blaps japonensis japonensis* Marseul, 1879 は、環境省において準絶滅危惧種として選定されている大型のゴミムシダマシ科の甲虫である（岸本・高桑, 2015）。鞘翅の会合部が癒着し後翅が退化するため（秋田・増本, 2016）、飛翔で移動することはできず、自発的な移動範囲が限られる。

本種は史前帰化種と考えられており、かつて西日本では農家の土間や納屋床などで普通に見られたようであるが、近年では人の生活様式の変化によりほとんど見られなくなったといわれている（秋田・益本, 2016）。

国内分布としては、本州、淡路島、四国、九州が知られる（中根, 1963; 中條・安藤, 1985; 秋田・益本, 2016）。特に記録が多いのは1950 - 1980年

代頃の中部や関西地域であり、最近の記録は全国的に少なく、見つかる場合も局所的なことが多いようである（水野氏, 私信）。東日本においてはもともと記録が多くなく、比較的まとまった最近の記録があるのは神奈川県（苅部・小山, 2010）くらいであろう（平野, 2004）。



図1. 新潟産ヤマトオサムシダマシ（スケールは1cm）

筆者は比較的近年に本種を新潟県で得ているため、分布記録としてデータを示すとともに採集時の状況と小考察を付記した。

1ex., 新潟県新潟市, 2. VI. 2009, 岩田泰幸採集, 愛媛大学ミュージアム収蔵予定。

記録個体（図1）の左中脚は腿節途中から先が欠損しており、体表面にも小さな傷や泥汚れが見られたことから少なくとも新成虫ではない。

なお、工場内で捕獲された個体であることから本報告では詳細な産地を示さないが、標本に付属するラベルには可能な限り詳細な地名を明記している。

記録個体の採集地点は工場2階部であり、工場内に本種の生息環境は全く見られなかったことから、これは屋外から迷入した個体と考えられる。ちなみに採集地点から屋外まで直近でも直線距離で20 m程度の距離があった。なお、記録個体が歩行により自発的に2階まで登ってきたかどうかは分からない。採集されたエリアには荷物搬入用エレベーターがあるため、これを介して持ち込まれた可能性もある。本種は基本的に地面を徘徊して生活しており、地面から離れた場所で得られた記録は少ないようであり（水野氏私信）、自発的な垂直方向への移動の可能性は低いと思われる。

屋外の環境は、草がパッチ状にみられる乾燥地である。可能な限り工場外において本種の探索を行ったが追加個体は得られなかった。現状では採集地周辺に生息地があるかどうかは分からない。また、工場や幹線道路があり物流量が多い地域であることから、物品とともに他所から持ち込まれた可能性も考えられる。

新潟県における本種の記録は極めて少なく、

2000年代に上越市柿崎区上下浜（海岸近く）で採集例があるようだが（水野・初宿両氏私信），その他に分布に関する情報は公表されていない。また，古い記録も見られないことから昔は多かったというわけでもなさそうである。

ちなみに日本海側の新潟近隣県では山形県と福井県で古い採集例があるようだが，新潟と同じく記録数はごく僅かである。さらに分布情報のほとんどない県が東北地方を中心に広がっている（水野氏私信）。これらの地域は本種の分布が元々希薄な地域である可能性が高いが，現状では情報が極めて少ないため詳細は不明である。特に東北地方の標本をお持ちの方がおられたら，是非とも記録を公表いただければと思う。

本報告を記すにあたり，種々の情報をご教授いただいた水野弘造氏（京都府宇治市），亀澤洋氏（埼玉県川越市），初宿成彦氏（大阪市立自然史博物館）に心よりお礼申し上げます。また，標本写真を撮影してくださった岩田朋文氏（富山市科学博物館），標本の受け入れを快諾いただいた吉富博之博士（愛媛大学環境昆虫学研究室）にも感謝の意を表したい。

引用文献

- 秋田勝己・益本仁雄，2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑. 208 pp., むし社.
 中條道崇・安藤清志，1985. ゴミムシダマシ科, pp. 295-341. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著，原色日本甲虫図鑑 (III), 保育社.
 平野幸彦，2004. コウチュウ目. 335-835 pp, 神奈川昆虫談話会編，神奈川昆虫誌.
 菊部治紀・小山茂樹，2010. 茅ヶ崎市でヤマトオサムシダマシを再発見. 神奈川虫報, (170): 10.
 岸本年郎・高桑正敏，2015. ヤマトオサムシダマシ. p. 405, 環境省編，レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-5, 昆虫類, ぎょうせい.
 中根猛彦，1963. ゴミムシダマシ科. 220-233pp, 中根猛彦・大林一夫・野村 鎮・黒沢良彦共著，原色昆虫大図鑑 [第2巻], 北隆館.

(岩田泰幸 359-1127 所沢市星の宮 2-3-5-102
 (e-mail: laccotrephes_1874@yahoo.co.jp))

【短報】茨城県におけるカミヤコガシラミズムシの新産地

カミヤコガシラミズムシ *Haliphus kamiyai* (Nakane) は，コガシラミズムシ科ヒメコガシラミズムシ属の1種である。分布は局所的であり，環境省レッドリスト 2015 において絶滅危惧 IB 類（環境省，2015），茨城県版レッドデータブックでは絶滅危惧 IA 類（茨城県，2016）に指定されている。



図1. 茨城県石岡市において採集したカミヤコガシラミズムシ.

茨城県ではこれまで，水戸市，ひたちなか市，笠間市において記録がある（大桃，1987; 高野・大桃，2000; 大桃・高野，2014）。筆者は茨城県石岡市において本種を採集したので，ここに報告する。採集地はガマ *Typha latifolia* やセリ *Oenanthe javanica* が優占する水深の浅い湧水湿地であった。本種の生態は食草を含め，不明な点が多い。同属であるマダラコガシラミズムシ *Haliphus sharpi* の食草はシャジクモ *Chara braunii* およびイトフラスコモ *Nitella tenuissima* var. *japonica* であると報告されている（Nakanishi, 2012）が，本調査において採集地周辺では確認されなかった。今後，本種の食草を含めた生態について明らかにしていきたい。

7exs., 茨城県石岡市, 3. XI. 2016, 渡辺黎也採集(図1)。

なお，標本の一部はミュージアムパーク茨城県自然博物館に寄贈した。

引用文献

- 大桃定洋，1987. 筑波研究学園都市およびその周辺の甲虫相（その5. 水生食肉亜目ハムシ科Adephaga）. おとしぶみ, (16): 27-33.
 高野 勉・大桃定洋，2000. 茨城県産甲虫リスト, りりぼし, (23): 2-155.
 Nakanishi, K., 2012. Biological notes on *Haliphus sharpi* Wehncke, 1880 (Coleoptera: Halipidae). Elytra, Tokyo, New Series, 2: 107-108.
 大桃定洋・高野 勉，2014. 茨城県産甲虫リスト補遺（4），りりぼし, (43): 3.
 環境省，2015. 別添資料4) レッドリスト（2015）【昆虫類】. URL <http://www.env.go.jp/press/files/jp/28061.pdf> (2017年3月24日アクセス).
 茨城県，2016. 茨城県版レッドデータブック<動物編>2016年改訂版. URL <http://www.pref.ibaraki.jp/seikatsukankyo/kansei/chojyuhogo/documents/rdbkakuron6-4.pdf> (2017年3月24日アクセス).

(渡辺黎也 305-0005 つくば市天久保 4-5-16
 筑波ビューハイツ 207
 筑波大学生物学類保全生態学研究室)